
コップと水

眠心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コップと水

【Nコード】

N8345C

【作者名】

眠心

【あらすじ】

暑い夏の日僕は君に水を入れてくれと頼んだ。渡されたコップの水を飲み干し僕は水が喉に通る感覚が愛に似ているか悩む

(前書き)

前に投稿させてもらいました水とコップという詩を元に短編小説風に書いてみました。元となった詩も読んで頂きたいです。

蝉の声と日差しが降り注ぐ夏色を感じる暑い日
喉の渴きを覚え目の前にあったコップに目をやり

「このコップに水を一杯くれないか」

僕は君にそう伝えたと、まだ途中だった足の指の爪を再び切りはじめた。

パチンパチン・・・と爪が勢いよく新聞紙の上に転げ落ちる。

コトン・・・光輝く水の入った透明なコップがテーブルの上に置かれるのに気づき

僕は爪を切るのをやめた。

「ありがとう」

と君に一言礼を言うと君は不思議そうな顔で微笑んだ。
この暑さのせいかがクンゴクンと水を一息で飲み干す。
僕はなぜだか幸せな気分になった。

空のコップに映るあなたを見つめて

僕は水が喉に通る感覚が愛に似てるか悩む

君から渡されたコップの中に愛なんてないと思った。

けれどその水を飲んだ瞬間幸せになったんだ。

喉の渴きを潤す事で得られる感覚なら知っている。
それとも違うもつと別の感覚

君の透き通るような笑顔を見れるだけで幸せだ。
当たり前にもらった水の入ったコップ
君の愛がそんな所にもあったなんて今まで気が付かなかった。

「水をもう一杯下さい」

僕は知らずに君に敬語を使っていた。

「ふふ」と笑うと

君は空のコップを持ち台所へと足を運んだ。

愛に色はない事も知っている

水に色はない事も知っている

でも確かにそこには色鮮やかな日常があるんだ。

(後書き)

詩を中心に書いているので、字数に悩まされました。

小説を書かれている方をとても尊敬します。

詩ブログみたいな物もやっています。良かったらお越し下さい。

<http://tsirrot.exblog.jp/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8345c/>

コップと水

2011年1月28日20時24分発行